

城山さんの作品から 勇気と元気がもらえる

城山作品に惹かれた理由

広野さんは、城山三郎さんの作品を十数冊は読まれているそうですが、何かきっかけはあったんでしょうか。

広野 学生時代（関西学院大学）、私は日本文学の専攻で近代文学のゼミだったので、夏目漱石や森鷗外作品はよく読んでたんですが、ほかあまり興味が湧かなくて。で、書店で面白そうな本を探していた時に、明治時代の経営者を取り上げている本が目にとまりました。非常に読みやすくわかりやすいし、ストーリーも面白い。それが城山さんの作品だったわけです。

ほかの経済小説は難しかったり、あるいは臨場感に欠けていたり物足りないんです。だから、面白そうな経営者の生涯を追っていると、たいへん、結果的に城山さんの本に辿り着いてました。

特に印象に残る作品は。

広野 すごくよく覚えているのは、（東急電鉄グループ総帥の故・五島界氏を描いた）『ビッグボーイの生涯』。あと、私と同じ関西出身でこんなすごい人がいたんだと感心させられたのが、松本重太郎さん（一〇歳にして赤貧から志を持って家出。銀行、鉄道、ビール会社などを次々と創業し、『西の洪水栄一』と言われた）を描いた『気張る男』。もう一冊が中山素平さん（元日本興業銀行頭取）を描いた『運を天に任すなんて』ですね。

人物が小説になっていて、近代文学よりも面白い。私、本当は経済学部に行っていたほうがよかったかもしれないですね（笑）。

城山さんの作品の魅力は、どこにあると思いますか。

広野 臨場感もそうですが、取り上げた人物の生涯の中で、たとえばどういう生い立ちであったかも、読むとすべてわかるじゃないですか。日本経済新聞の『私の履歴書』なんかもそういう部分があります。城山さんの作品は、その人物のルーツみたいなどころからわかる感じがすごい。そこをすこく調べてらして、情報取捨と取材力に感心させられます。もう一つ、人の人生っていい時ばかりじゃないわけで、そのあたりもリアルに描かれていますよね。

ます。たとえば、高島屋の鈴木弘治社長のそれは、『粗にして野だが卑ではない』ですが、広野さんも何かありますか。

広野 座右の銘まではいかないですけど、作品やタイトルを通じて、考え方みたいなものはかなり学ばせてもらった気がします。取り上げられている経営者は創業者や創業家のトップが多く、不可能を可能にしているみたいな、前向きでダイナミックな志にも共感しますね。

逆には、城山さん以外の経済小説はあまり読まれない？

広野 最近だと、津本陽さんが書かれた『小説・洪水栄一』の本が上下巻であって、少し城山さんの作品にも似ていて面白いですけど、やっぱりダイナミックさや臨場感という点では、城山さんのほうが上だと思います。最近の若手起業家も自伝を書いたりしますが、経営者として五〇年も六〇年も荒波を乗り越えてきた人たちが違って、まだ歴史がないので物足りない。それと、割と成功物語が多いので、あまり強い印象に残らないんです。

城山さんの作品からは、失敗の教訓を学ぶことも多いと。

広野 そちらのほうが多いかもしれません。やっぱり人生山あり谷ありで、失敗が多いからこそ、たくさんドラマが生まれていくわけで、いい

時ばかりのことが描写されていたら、だいたい面白くないですよ。興味本位とかでなくて、そういう波瀾万丈の人生を送った人物の物語を説かせてもらおうと、（同じ経営者として）勇気が出ますし、元氣ももらえるんです。

たとえば、『気張る男』の松本重太郎さんのように、破産して資産をすべて失い、そこから再び這い上がっていく様子は、本当にダイナミックです。時代は変わっても、これからは明治維新や戦後の成長期のような、躍動的な経済の時代を創っていないといけない気がします。

「戦後の経済史」が学べる

広野さんの座右の銘は「温故知新」で、洋菓子店のヒロタを買収して再生させるなど、老舗ブランドの再活性化ビジネスに特徴があります。古い経営者の考えでも、いいところは大事にしよう。

ヒロタにしても、創業者だった廣田定一さんという方が「あまいお菓子はからかった」という本を書かれているんです。すでに亡くなられているので、そういう本を遺してくださったことでヒロタの歴史が見えてくる。老舗企業も、トップが代わっていく過程で必ずしも創業者が継がなくていいと思いますが、やはり創業の精神は大切だと思います。



城山氏の作品は、いまでも時々読み返すことがあるという広野道子氏。

私自身も、郷里が京都の丹後というとても古い街なので、歴史や伝統を持ったものが好きなんです。歴史や文化が古いということは、何がしか認知されたものがあるから後世に残っていくわけで、だてに古いわけじゃないんですね。会社も同じだと思います。

城山さんに生前、お会いになったことはありますか。

広野 残念ながらありません。テレ

ビや雑誌の対談、鼎談、インタビューなどで拝見するだけで。ブラウン管や誌面を通じて、城山さんは割とハッキリものを言われる方という印象でしたが、経営者のみならず、城山さんの本は、普通のビジネスマンガが読んでも、勇気や元氣を与えてくれるんじゃないでしょうか。

城山さんの作品の中では、オーナーに匹敵するリーダーシップを持っていたといえ、中山素平さんはサラリーマン経営者でしたから、こうした本は、一般のサラリーマンでも、より共感しやすいかもしれませんね。

広野 中山さんを描いた本を読んでいると、興銀はこうして重厚長大産業を育てていったんだとか、危機に瀕した金融界をどうやって応援したかとか、人間ドラマを通じて、その時代の歴史がわかりますよね。そういう、中山さんが率先垂範し

た興銀DNAというものはいまでも感じられて、ほかの銀行の方とお会いすると、興銀出身の方はやっぱり考え方がちよつと違うんですよ。

私自身、起業する前に勤めていた企業で当時、興銀の東京支店とお取引があったんですが、その支店長が、いまのみずほコーポレート銀行頭取の齋藤宏さんです。バブルが崩壊した一九九〇年代以降、「重厚長大産業」といえば興銀」という看板を下ろし、興銀の東京支店が「これからは軽薄短小産業を育てるんだ」と宣言したんです。

そこで金融面で後方支援していったのが、ソフトバンクさんやカルチュア・コンビニエンス・クラブさんです。興銀の東京支店がなければ、こうした企業はなかなか育たなかったし、株式市場もできなかったのではないかとさえ思うほどです。重厚長大と軽薄短小という差はあれど、そういう時代感覚も、城山さんは中山さんを通じて描かれていたんだと思います。

いわば、日本の近代史以降を教わっているようなもので、特に戦後の日本経済なんて学校で教えてもらえませんが自分で勉強するしかないわけですけど、城山さんが描いた人たちがやってきたことを読むと、だいたいことは把握できますね。

（聞き手＝本誌・河野圭祐）